

夕

2024 - 2025

張

旅行記

YUBARI TRAVELOGUE



今も残る炭鉱の記憶

やま



石炭の時代を越えて、今を生きる町

夕張市

YUBARI CITY

夕張市は、石炭産業によって成長し、その終焉とともに大きく再編された町です。明治から昭和にかけて炭鉱開発が進み、清水沢・大夕張・南大夕張などの炭鉱地区が形成されました。炭鉱住宅や学校、病院、商店街が整えられ、働く場と暮らす場が一体となった炭鉱都市として発展し、最盛期の人口は約 11 万～12 万人に達しました。

しかし 1960 年代以降、エネルギー政策の転換で石炭産業が衰退し、1970～80 年代に炭鉱が相次いで閉山しました。雇用喪失により人口は急減し、1990 年代

には 2 万人台まで落ち込み、市街地の縮小や施設の整理が進みました。

2000 年代以降も人口減少は続き、現在の人口は約 6,000 人前後です。炭鉱住宅の多くは解体されましたが、夕張石炭博物館や坑口、ズリ山、旧鉄道跡など、炭鉱の歴史を伝える遺構は各地に残っています。現在の夕張は、夕張メロンに代表される農業や観光を軸に、縮小した規模の中で町を維持し、新たな価値を模索しています。

最盛期

(1960 年代)

人口

11 万人～
12 万人

基幹産業

石 炭

現 在

(2025 年 12 月)

人口

5,790 人

基幹産業

農業、観光等

夕張市内の主要な炭鉱地区

大 夕 張

三菱大夕張炭鉱を中心とする炭鉱会社色の強い独立した町でしたが、炭鉱閉山後に人口が流出し、現在は建物の多くが解体され、町としての姿はほぼ失われています。

清 水 沢

夕張で最も早く発展した生活拠点型の炭鉱地区で、炭鉱住宅や学校、病院、商店街が整備され、家族定住を前提とした町として炭鉱都市の基盤を支えました。

南 大 夕 張

戦後に開発された新しい炭鉱地区で、三菱南大夕張炭鉱を軸に形成されましたが、閉山後にシューパロダム建設によって旧市街地の大部分が水没し、物理的な町の姿を失いました。

清水沢

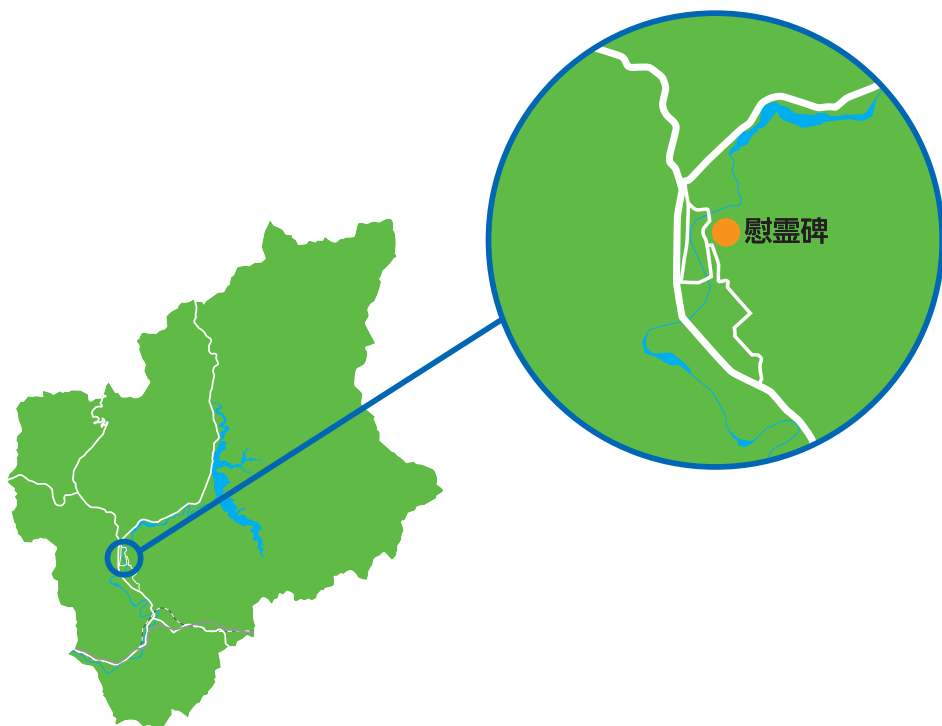
SHIMIZUSAWA

清 水沢地区は、炭鉱によって発展した夕張を支える重要な地域でした。戦後、北炭清水沢炭鉱の稼働により住宅や学校、商店街が整い、多くの鉱員と家族が暮らす活気ある炭鉱の町が形成されました。

1970年代には、将来の主力炭鉱として北炭夕張新炭鉱が開発され、清水沢は再び注目されます。最新設備を備えた大規模炭鉱で、製鉄用原料炭を産出し、日本の産業を支える役割を担いました。

しかし、深部採炭による事故が相次ぎ、1981年の大事故をきっかけに新炭鉱は閉山します。これにより清水沢は急速に衰退しました。

清水沢地区は、夕張の炭鉱産業の生活拠点であり、北炭夕張新炭鉱の時代には「最後の希望」を背負った地域でした。



炭鉱住宅

清 水沢地区では、北炭が鉱員と家族のために炭鉱住宅を建設し、住宅の周囲に学校や浴場、購買所などを整えて、生活が地域内で完結する炭鉱集落を形成していました。これらの住宅や跡地は、現在では夕張の炭鉱史と人々の暮らしを伝える歴史的資産として位置づけられています。



清水沢の炭鉱住宅は、閉山後に役目を終え、多くが解体されました。現在残る建物も空き家が多く、老朽化した姿で炭鉱の時代を伝えています。

Point

炭鉱住宅の多くには浴室が設けられておらず、住民は地区内に設置された共同浴場を日常的に利用していました。入浴は生活の一部であると同時に、交流を深める場でもありました。



つうどう

坑口跡（通洞跡）

北炭夕張新炭鉱があった清水沢清陵町には、閉山後も当時使用されていた通洞の入口が現在も残されています。この通洞は鉄格子やフェンスによって封鎖され、安全対策が施されていますが、炭鉱稼働当時の姿を伝える貴重な遺構として、外観はほぼそのまま保存されています。

この通洞口は、かつて地下 800～900 メートル級の深部坑道へと続く入口でした。現在でも外からその姿を確認することができ、炭鉱跡を巡る歴史散策の対象となっています。地元住民や遺族の意向を受け、坑口内部を完全に閉塞せず、外気の通りを残した状態で保存されていると説明されることもあります。これは、1981 年の事故で亡くなった鉱員への配慮が背景にあると伝えられています。

また、通洞口の近くには、1981 年のガス突出事故で犠牲となった鉱員を追悼する慰霊碑が建てられており、坑口跡と一体となって事故の記憶と炭鉱の歴史を今に伝えています。

このように清水沢の通洞跡は、閉山後も封鎖された状態で残され、北炭夕張新炭鉱の構造や、そこで起きた出来事を伝える重要な遺構となっています。



通洞口からは坑内電車が運行されており、これを利用して山の反対側へ通行することができました。その先には事務所施設が設けられており、そこを起点として坑内へ入る仕組みになっていました。

慰霊碑

北 炭夕張新炭鉱の慰霊碑は、1981 年 10 月に起きたガス突出事故で亡くなった 93 人の鉱員を追悼するため、清水沢清陵町の通洞（坑口）跡近くの高台に建立されています。慰霊碑は、事故現場と直接結びついた場所にあり、封鎖された坑口とともに、災害の記憶を今に伝える存在です。

この慰霊碑は、犠牲者への追悼だけでなく、炭鉱労働の危険性や夕張の炭鉱史を後世に伝える「記憶の場」として位置づけられています。現在も地域の歴史遺産として保存され、事故を風化させないための象徴となっています。



ズリ山

ズリ山とは、炭鉱で石炭を掘り出す際に一緒に出てくる、石炭にならない岩石や土砂を捨てて積み上げた人工の山のことです。炭鉱では大量の掘削が行われるため、ズリと呼ばれる不要物も膨大な量になり、それを処分するためにズリ山が形成されました。

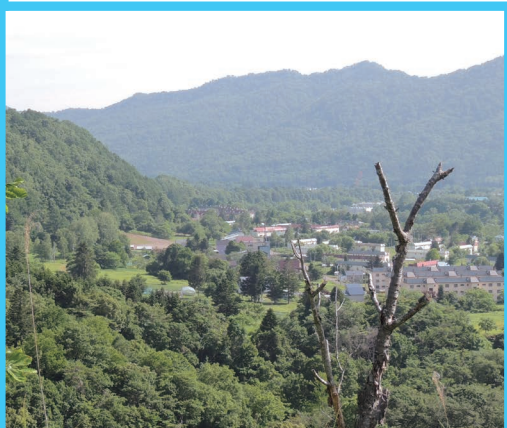
ズリ山は単なる廃棄物の集積ではなく、炭鉱の規模や稼働期間を視覚的に示す存在でもありました。大きなズリ山がある場所ほど、長い年月にわたって採炭が続けられ、多くの人が働いていたことを物語っています。

一方で、ズリ山は崩落や自然発火の危険を伴うこともあり、炭鉱の閉山後は整形されて緑化されたり、一部が撤去されたりしました。現在では、地形の一部として残るものも多く、炭鉱の記憶を今に伝える象徴的な景観として認識されています。



ズリ石





ズリ山から見える夕張 8

南大夕張

MINAMIOYUBARI

南 大夕張は、三菱南大夕張炭鉱を中心
に発展した炭鉱地域でしたが、1987 年の
閉山によってその役割を終えました。その
後、シューパロダムの建設により、川沿い
の低地や旧鉄道跡など一部の区域は
シューパロ湖に沈みました。

一方で、南大夕張の住宅地や炭鉱施設の
多くは湖面より高い場所にあり、水没する
前に計画的に移転・解体が進められまし
た。そのため、町全体が湖に沈んだわけ
ではなく、現在は水没した場所と、建物
が撤去されて更地となった場所が混在
しています。

かつて最新鋭の炭鉱都市として期待され
た南大夕張は、今では湖と地形だけが
残り、夕張の炭鉱史を静かに物語る場
所となっています。



三菱大夕張鉄道保存車両

三菱大夕張鉄道の保存車両は、かつて清水沢から南大夕張、大夕張炭山へと延びていた専用鉄道で実際に使用されていた車両を、旧南大夕張駅跡に保存・展示しているものです。炭鉱と地域の暮らしを支えた鉄道の姿を、今に伝える貴重な遺構となっています。

保存されているのは、旅客輸送に使われた客車や、石炭輸送用の貨車、北海道ならではの厳しい冬に対応したラッセル式除雪車などで、いずれも炭鉱鉄道の実用性を物語る車両です。一部は内部を見学でき、当時の鉄道利用の様子を具体的に感じ取ることができます。

これらの車両は、鉄道廃止後に地元有志によって保存され、現在も保存会の手によって整備・管理が続けられています。旧南大夕張駅跡と保存車両は、炭鉱・鉄道・町が一体となって存在していた時代を象徴する産業遺産として評価されており、南大夕張の記憶を今に伝える重要な存在となっています。



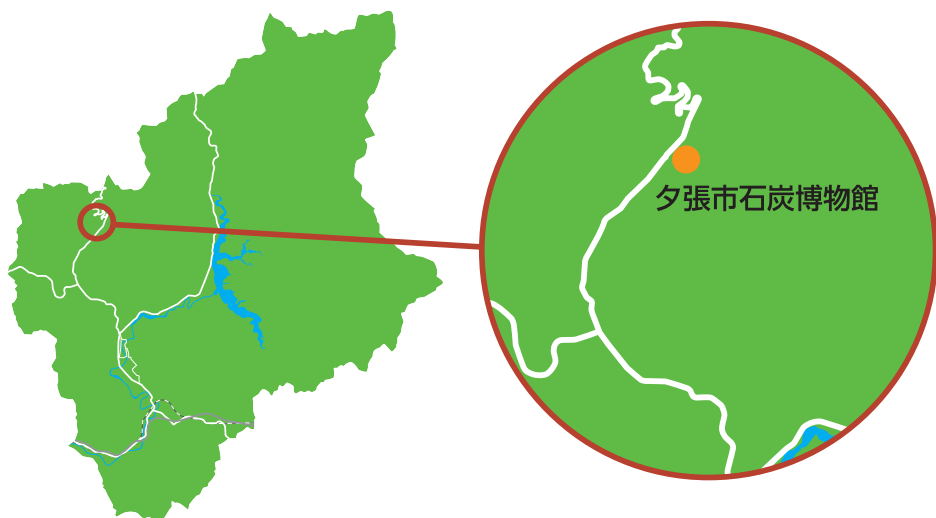
夕張市石炭博物館

YUBARI COAL MINE MUSEUM

夕張市石炭博物館は、夕張が石炭によって発展した歴史と、炭鉱で働いた人々の暮らしを総合的に伝える施設です。夕張が「炭鉱の町」として歩んできた歩みを、産業・技術・生活の視点から分かりやすく紹介しています。館内では、採炭の仕組みや炭鉱技術の変遷、炭鉱住宅での暮らしなどが、写真や映像、実物資料、ジオラマによって展示されています。単なる産業史にとどまらず、炭鉱とともに生きた人々の日常に焦点が当てられている点が特徴です。

大きな見どころの一つが、旧北炭夕張炭鉱の実際の坑道を利用した模擬坑道展示です。来館者は坑内を歩きながら、地下での作業環境や石炭層の様子を体感することができ、炭鉱労働の厳しさを実感できます。

また、博物館周辺には石炭の露頭など屋外展示もあり、夕張の地質と石炭の関係を学ぶこともできます。夕張石炭博物館は、炭鉱が地域に残したものを静かに見つめ直し、記憶として次世代に伝える役割を担う場所となっています。



地下展示室

石 炭博物館は、夕張が石炭によって発展した炭鉱都市であった歴史を伝える施設です。石狩炭田の開発から炭鉱の操業、そして閉山に至るまでの歩みを、資料や展示を通して紹介しています。

館内では、炭鉱で使用された道具や写真、図面などが展示され、採炭技術の変化や、炭鉱が地域社会に果たした役割を知ることができます。あわせて、時代ごとの鉱員の装備や作業

方法の違いも紹介されており、手掘り中心の時代から機械化が進んだ後期に至るまで、炭鉱労働の変遷を具体的に理解することができます。

展示の中では、木製支柱や鋼製支柱、坑木の組み方などが示され、落盤を防ぐための工夫や安全対策についても解説されています。また、採炭に用いられた機械や道具が配置され、坑内作業がどのように変化してきたのかを実感できる構成となっています。

夕張石炭博物館は、炭鉱の技術や産業史だけでなく、働き方や人々の暮らしの変化を伝える施設として、夕張の歴史を知る上で欠かせない存在です。



模擬坑道

模擬坑道は、夕張石炭博物館の地下展示室に設けられた体験型の展示空間です。実際の炭鉱坑内をモデルにして造られており、来館者が歩きながら坑内の様子を理解できるようになっています。

坑道内は照明を落とした薄暗い環境で、天井が低く、通路も狭く造られています。これは、炭鉱が地下深くで掘り進められていたことや、作業空間が決して広くなかったことを体感的に伝えるためです。壁や床、支柱の配置も実際の坑内構造を参考にして再現されています。

模擬坑道は、炭鉱労働の厳しさや危険性を、文字や写真だけでなく空間として理解できる点が特徴です。地下で働いた鉱員たちの環境や作業条件を想像しながら見学できる、博物館の中でも重要な展示となっています。



あ と が き

私がこの冊子を制作するきっかけとなったのは、中学生の頃、父がかつて炭鉱で働いていたことを知ったことでした。

炭鉱は、どこか遠い土地の歴史の話だと思っていたため、日本にも、そして自分にとって身近な場所に存在していたことに、大きな衝撃を受けました。

中学生の頃に夕張を旅行で訪れた際、大学生の方が炭鉱について熱心に調べ、話を聞いている姿を目にしました。その様子から、炭鉱という場所が単なる過去の産業ではなく、今も人を惹きつける特別な意味を持つ存在なのだと感じたことを、今でもよく覚えています。

大人になってから改めて夕張を訪れたとき、私はこの街について、財政破綻や夕張メロンといった断片的な情報しか知らなかったことに気づきました。

その背後にある歴史や人々の暮らし、炭鉱がこの街に果たしてきた役割について、ほとんど理解していなかったのです。かつてこの地にあった暮らしや街の姿、そして現在、関東に暮らす私が遠い土地である北海道・夕張を実際に訪れ、見て、調べたことをまとめたいと考え、この冊子を制作しました。

夕張の炭鉱の歴史と、この街が歩んできた時間を改めて見つめ直し、少しでも多くの方に伝えていきたいと考えています。

製作者：民尾

連絡先：kotori366@icloud.com 14

